学園点描

6月より個別学習指導員としてT・Gさんが新しく加わりました。豊かな人生経験を持つ“人生のベテラン”です。

《H学園》

NO.7　　R7．6．3

担当：校長

5月21日（水）、18時30分より本校にてH学園教育後援会総会を開催いたしました。

当日は、昨年度ご指摘をいただいた事業報告および会計報告について、できる限り詳細な内容をもってご報告いたしました。また、規約につきましても、これまで明確でなかった点を見直し、新たに加筆・整備いたしました。総会には、区長様やPTO役員の皆様にも理事としてご参加いただき、協議にも積極的にご協力いただきましたことを心より感謝申し上げます。

なお、本年度の後援会長にはY・M様が選出されましたことを、併せてご報告申し上げます。詳細につきましては、H学園教育後援会だより」として回覧いたしますので、お目通しいただければ幸いです。災害拠点の場、将来ここで働き納税者としていきる人間を育てるのも学園の存在意義です。

今後とも、地域とともにある学校づくりを目指し、教育後援会の活動を進めてまいりますので、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

地域と学校、人と人との心の距離

教育後援会の理事の中に、懐かしいお顔がありました。

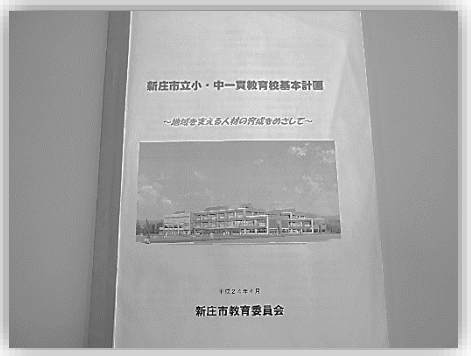
I・Sさん。小中一貫教育校、現在のH学園の設立に向けて、何度も会議を重ね、ともに歩んだ方です。

「わたしのこと、覚えていますか？」会議のあと、思わず駆け寄って声をかけました。「もちろん覚えていますよ。おかえりなさい」I・Sさんは、変わらぬ笑顔でそう答えてくださいました。

その日の会議では、I・Sさんがこんなことを話されました。

「地域と学校が、心の距離を感じているように思います。物理的な距離ではなく、心理的なつながりが弱くなっているのではないでしょうか」

その言葉が、今も胸に残っています。



小中一貫教育校基本計画

思い返せば、かつての会議でも、I・Sさんは一貫して、小さな学校から大きな集団に移る子どもたちの心の居場所を案じておられました。新しい友だちと、また安心して心を通わせられるのか。そこに深いまなざしがあったことを、私は忘れていません。

そして不思議な偶然ですが、その2日後に出た6学年だより『輝』No.9には、『本当の友達とは？』をテーマに道徳で考えたことが紹介されていました。

「友達はいるけど、親友はいないよ」

かつて、ある中学校で出会ったＢ子という女子生徒の言葉を思い出しました。

Ｂ子は、同じクラスのＡ子と部活動のことでぶつかり、関係がぎくしゃくしていました。相談を受ける中で、彼女はそんな本音を打ち明けてくれたのです。

今の子どもたちは、対人関係においてのストレスを強く感じています。

本音をぶつけることを恐れ、つながりが壊れるくらいならと、距離を置こうとすることもあります。少子化やコロナによって、人と深く付き合う経験が少なくなりました。けれど、ぶつかる経験を通してこそ、“ただの友達”が“本当の友達”へと育っていくことが、10 代の心の成長にはよくあります。

ある雨の日の放課後のことでした。

その日、Ａ子は欠席しており、1 時間目から 6 時間目までに配られたプリントが、机の上に山のように積まれていました。私は「誰か、これをＡ子さんの家に届けてくれない？」と声をかけました。

「家知らないもん」「雨だし無理」――そんな声の中、Ｂ子が手を挙げました。

「わたし、持って行く」

その一言に、私は驚きつつも、彼女に託しました。

翌日、Ａ子さんの連絡帳にお母さんからのメモが添えられていました。

「昨日ファイルを届けてくださったのはどなたでしょうか。実は、濡れないようにハンカチのような布で包んで、ポストに入れてくださっていました。とてもありがたかったです」

Ｂ子は、Ａ子の家が留守であることを確かめると、雨除けのないポストを見て、自分のハンカチでそっとファイルを包み、黙って投函したのだそうです。

Ａ子とＢ子の友情は、40 歳過ぎた今も続いているそうです。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。

平日の日中に学校施設をご利用なりたい個人・団体の方は遠慮なくご連絡ください。